

Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Worlds To Our Shaking Wo





Apichatpong Weerasethakul [Thailand]

Q / Satoko Ichihara

Saadat Ismailova [Uzbekistan / France]

Nastaran Razawi Khorasani [Iran / the Netherlands]

THEATER  
COMMONS  
TOKYO '24  
2024.2.29-3.12

Minouk Lim [Korea] \*Related Program



Commons Tour

Commons Forum #1

Commons Forum #2

Commons Forum #3

## 開催概要

都市にあらたな「コモンズ(共有地)」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。第8回目となる今回は、VRパフォーマンス、演劇、映像上映などを、都内各所にて開催します。

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なものと複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

シアターコモンズ '24

### 会期

2024年2月29日[木]-3月12日[火]

### 会場

東京都内複数会場

### 主催

シアターコモンズ実行委員会  
台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター  
ゲーテ・インスティテュート東京  
在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ  
オランダ王国大使館  
特定非営利活動法人 芸術公社

### 助成

令和5年度文化庁我が国アートのグローバル展開推進事業、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】

### 協力

日本科学未来館

### 会場協力

株式会社ワコールアートセンター

## ABOUT

A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. Catch a VR performance, plays, screenings, and more across the city at the eighth edition of Theater Commons Tokyo!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater. By using theater – that is, by applying theatrical ideas – in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery.

Theater Commons Tokyo '24

### Date

February 29th - March 12th, 2024

### Venues

Various places in Tokyo

### Organized by

Theater Commons Tokyo Executive Committee  
Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan  
Goethe-Institut Tokyo  
Embassy of France in Japan / Institut français du Japon  
Embassy of the Kingdom of the Netherlands  
Arts Commons Tokyo

### Supported by

The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2023, Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

### Co-operated by

Miraikan - The National Museum of Emerging Science and Innovation

### Venue support

Wacoal Art Center



# ディレクターズ・ノート

## 震える世界に

相馬千秋

大地が震えている。

地球のエネルギーによって。あるいは投下された爆弾の破壊エネルギーによって。今この瞬間も、震える大地で、誰かが震えている。寒さに震え、飢えに震えている。怒りに震え、悲しみに震えている。言葉にできないすべての感情に震えている。命が震えている。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）発表によると、2022年末、地球上の難民・避難民が人類史上はじめて1億人を超えた。実に世界の74人に1人、全世界人口の1%以上が故郷を離れなければならないという衝撃的な数字である。21世紀に入ってからの20年間を振り返るだけでも、数えきれないほどの紛争、迫害、災害が世界各地で発生し続けている。アフガニスタン紛争、シリア、ソマリア、イエメン、ミャンマーでの内戦、ロシアによるウクライナ侵攻、そしてパレスチナ・ガザへのイスラエル軍による侵攻。日本でも東日本大震災および福島原発事故や、喫緊の能登半島地震を含め絶え間なく連続する自然災害で、住む場所を失ってしまった人々が避難生活を続けている。

とりわけ2023年10月7日、ハマスがイスラエルを奇襲したことに端を発する、イスラエル軍によるガザ攻撃では、すでに3万人近い一般市民や子どもたちの命が失われ、その何十倍もの人々が負傷し、家族や家を失い、土地を追われ、生命維持ギリギリの難民状態にある。国際法さえ機能しないこのような状況に対し、世界各地ではデモや抗議活動が展開されているものの、周辺諸国をも巻き込んだ構造的暴力の応酬を止めることはできない。極めて大きな緊張の中で、世界は今、あちこちで裂け、炎症し、激烈な痛みで震えている。

日本に関して言えば、2020年から2023年まで続いたパンデミックの後遺症が癒える間もなく、度重なる天災が文字どおり大地を揺さぶっている。オリンピックから万博へ、非常事態を直視せずに突き進む空虚な巨大プロジェクトを尻目に、私たちは宙ぶらりんのままヴィジョンなき危機の時代に放り出されている。

止めることのできない構造的暴力や天変地異を前

に、芸術に何ができるかという自己証明の問いはほとんど意味をなさない。だが、何もなす術がない状況を受け入れながら、これらの現実を想像し続ける扉を開き続けるために、演劇・劇場の知（コモンズ）を使い続けることはできるはずだ。劇場は古来、舞台上で展開されるフィクションを通じて、他の時代、他の場所、他の人々の世界に触れる場であった。それがフィクションであるにもかかわらず、しかしそれがフィクションであることによって、人々は遠い昔の、遠い場所の、見ず知らずの誰かの悲劇を自分の現実に重ね合わせ、共感したり、分析したりすることができた。今、私たちは無力にも他所・他者を想像することしかできないかもしれないが、演劇・劇場が蓄積してきた共有知としての「想像する力」だけを頼りに、この扉を開き続けるしかない。

今回のシアターコモンズのプログラムは、筆者自身がプログラム・ディレクターを務めた世界演劇祭テアター・デア・ヴェルト2023（2023年6月29日～7月18日、ドイツのフランクフルト、オフエンバッハで開催）で創作ないし発表された作品を主軸に構成されている。「世界を複数化する」というヴィジョンを掲げた本芸術祭のハイライトを日本の観客とも共有したいというシンプルな発想で編まれたプログラムは、しかし2023年10月7日以後、まったく異なる意味を帯びることになった。ドイツではそれまでも、2022年のドクメンタ15での一連の炎上で、反ユダヤ主義と表現の自由をめぐる分断線が鮮明化していたが、10月7日以降は、イスラエルを批判するアーティストや文化人がキャンセルされるケースが相次ぎ、また逆に彼らがドイツの公的文化機関や芸術祭をボイコットする動きも加速し、状況は深刻だ。今振り返れば、西洋中心主義的な世界観・歴史観を脱白し、複数の世界を生成することを目指した芸術祭においてさえ、こうした対立が水面下での亀裂や抑圧を生み出していたのである。

今回のシアターコモンズでは、パンデミックからさらなる分断の時代へ、混沌としますます見通しのきかない世界の中で、想像力の扉を開け続ける身振りとして、5人の

アーティストの5つの異なる世界に飛び込んでみたい。

アピチャップン・ウィーラセタクンの『太陽との対話（VR）』は、VR技術によって拡張された身体や知覚をもって、真空の海底や洞窟にダイブするような経験だ。言語を超えた映像詩、坂本龍一の音楽が作り出す波動、空間に漂う光の粒子たち……。そこでは時間感覚が変調し、夢とも臨死体験とも言える特異な経験の連なりが、私たちを異世界へと誘う。

一方、古くから人間が作り出してきたフィクションそのものも、現代の想像力の扉への導火線たり得る。市原佐都子は、日本に古くから伝わる「俊徳丸伝説」から出発し、この物語がもつ構造や悲劇性を現代に読み替え、文楽の形式を取り入れた現代の人形劇を創作した。そこでは、子捨て、病める身体への差別、親子の葛藤、救済といった原作の悲劇的モチーフが、クイア的な視点から徹底的に読み替えられ、善悪を超えた彼岸へと見る者を連れ去る。

ウズベキスタン出身の映像作家サオダット・イズマイロボは、中央アジアに伝わる神話や民話、儀式、残された古い映像記録などから異世界を立ち上げていく。シルクロードの砂漠や古代遺跡、過去および現在のイスラーム世界の都市と人々、動物たち、旧ソ連時代に建設された建物群……。そこでは現実と異世界の境界が曖昧になり、集団的な記憶が立ち現れては消え、見る者を圧倒的な映像美へと誘う。

幼少期に難民としてイランからオランダに移住したナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニは、祖国イランに暮らす子どもたちとの電話通話からソロパフォーマンス『Songs for no one – 誰のためでもない歌』を生み出した。受話器の向こうの不可視の子どもたちは、声だけの存在として舞台に現れ、私たちの想像力をイランの日常と接続する。制限された自由の中で想像力を絶やさない子どもたちの声とアーティストの歌唱ショーは、人々に自由を鼓舞するエンパワメントともなり得るはずだ。

韓国を代表するアーティスト、イム・ミヌクは今回、大林財団の助成のもと東京で2年がかりのリサーチを経て、隅田川と東京湾周辺を屋形船で周遊する水上ツアー・パフォーマンスと、それに関連した展覧会を同時開催する。屋形船の中で行われる音楽やガイド、川辺で行われる出来事の交錯によって、境界をめぐる認識や身体感覚が再編成される旅となるだろう。

また、これらのアーティストの芸術実践やそれを下支える思想や世界観を、3つのフォーラムを通じて掘り下

げていく。「コモンズ・フォーラム#1」では、イスラーム圏に出自を持つ2人のアーティストを交えつつ、過去そして現在において不可視にされている存在への芸術的アプローチについて、現在の世界状況も踏まえて議論する。「コモンズ・フォーラム#2」は、ジェンダーとパフォーマンス、社会とパフォーマンスティヴィティの関係について、最新の創作実践と理論をブリッジしながら考察を深めたい。「コモンズ・フォーラム#3」では、「現実とは何か」という哲学的かつ科学的な問いをめぐる、VR（仮想現実）作品を発表するアピチャップン・ウィーラセタクンと脳科学者の藤井直敬との対話からアプローチしていく。

さらに今回は、コロナ禍の3年間に失われた集会の機会を回復し、その場に集い時間や空間を共有することで生成される対話や交流にも重きを置く。初の試みとして、「コモンズ・ツアー」と題し、2週末にわたり、シアターコモンズの演目やアーティストのトークを集団で鑑賞し経験を共有するツアーを企画する。演目やトークの鑑賞だけでなく、その前後のナビゲーターや参加者とのおしゃべり、記念撮影など、シアターコモンズを能動的かつ横断的に楽しむツアーとなる予定だ。ぜひご参加いただきたい。

\*\*\*

正直に言えば、この文章を書いている2024年1月中旬現在、ここに何を書いても思考を定着させられない、させたくない困難さを抱えている。大地が震え、人々の命が震える世界で、私たちはなす術なく立ち尽くしている。シアターコモンズが開催される2ヶ月後、世界はどうなっているのだろう。あまりに不確かな世界の中で、それでも想像力の扉を開け続けるささやかな共有地として、今回のシアターコモンズは立ち現れる。今はその扉を、ただ保留して開けておくことだけを約束したい。

### プロフィール

相馬千秋（そうま・ちあき）| シアターコモンズ実行委員長兼ディレクター（2017-現在）。NPO法人芸術公社代表理事。アートプロデューサー。演劇、現代美術、社会関与型アート、VR/ARテクノロジーを用いたメディアアートなど、領域横断的な同時代芸術のキュレーション、プロデュースを専門としている。フェスティバル/トーキョー初代プログラム・ディレクター（2009-2013）、あいちトリエンナーレ2019および国際芸術祭あいち2022パフォーミングアーツ部門キュレーター。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章、2021年芸術選奨（芸術振興部門・新人賞）受賞。2021年より東京藝術大学大学院美術研究科准教授。2023年ドイツで開催された世界演劇祭テアター・デア・ヴェルト2023のプログラム・ディレクターを務めた。



©NOI CREW



# Director's Note

## To Our Shaking Worlds

Chiaki Soma

The ground is shaking.

It's the energy of the earth; it's the destructive energy of dropping bombs. And at every moment, somebody stands upon this ground, shaking. They are shaking from cold, shaking from hunger. They are shaking in anger, they are shaking in grief, they are shaking from all the indescribable feelings bottled up inside. Life itself is shaking.

According to a report by UNHCR, the number of refugees and people forcibly displaced worldwide surpassed 100 million for the first time in history at the end of 2022. This is a shocking statistic: one in 74 people, or 1% of the global population, has been forced to leave their homelands. Looking back at these first two decades of the 21st century alone, we find countless conflicts, persecutions, and disasters around the world. The war in Afghanistan; conflicts in Syria, Somalia, and Yemen; the Myanmar civil war; the Russian invasion of Ukraine; the Israeli military's invasion of Gaza, Palestine. Even in Japan, many continue to live in shelters after relentless natural disasters, including the Great East Japan Earthquake and subsequent Fukushima nuclear accident, as well as the most recent and pressing Noto Peninsula Earthquake.

Above all, the Israeli military's invasion of Gaza, triggered by Hamas's surprise attack on Israel on October 7, 2023, has resulted in the deaths of nearly 30,000 civilians and children, with tens of times more injured, without family members and homes, forcibly displaced, and barely surviving in refugee conditions. International law is deemed useless, and while demonstrations and protests have erupted globally, they have been unable to stop the structural violence, in which neighboring countries have now also been embroiled. Amid this extreme tension, the world is tearing apart everywhere, inflamed and shaking in severe pain.

In Japan, numerous natural disasters have been literally rattling the country's ground, leaving us without reprieve to heal from the aftereffects of the pandemic that continued from 2020-2023. While hollow, large-scale projects from the Olympics to the World Expo plow ahead as if there were no state of emergency, we are lost in a limbo, thrown into a visionless era of crisis.

It is virtually meaningless to pat ourselves on the back by asking what art can do in the face of

unstoppable structural violence and catastrophe. However, we can still harness the wisdom (commons) of theater (spaces) to continue opening imagination's door for these realities, while also realistically accepting the fact that we are at a loss. From ancient times, the theater has provided windows into different times, places, and livelihoods through the fictions that have unfolded on stage. Despite being fiction—or precisely because of it—these stories have allowed people to see their own realities in the tragedies of strangers set in distant places, long ago. They have been able to analyze and empathize with them. If all we can do now may be to helplessly imagine other places and people, we must continue to open this door, solely relying upon the power of imagination that theater (spaces) have accumulated as collective wisdom.

I served as Program Director for Theater der Welt 2023, held in Frankfurt and Offenbach, Germany from June 29 to July 18, 2023. This year's Theater Commons Tokyo program centers on works that were created for this festival or presented there. I planned the program based on a simple desire to share these highlights with audiences in Japan. After October 7, 2023, however, the festival's vision—"pluralizing the world"—took on a completely different meaning. While a slew of controversies at 2022's Documenta 15 had already thrown into sharp relief the potential impact of feared antisemitism, since October 7, many artists and cultural figures in Germany have faced career penalties for criticizing Israel. In turn, they have accelerated movements to boycott public cultural institutions and art festivals in Germany, leading to a dire situation. In retrospect, below the surface of these festivals—which aimed to generate plural worlds, disrupting Western-centric views of the world as well as history—similar contentions had already been causing deep internal fissures.

For this year's Theater Commons Tokyo, we invite you to leap into the respective worlds of five artists, as a way of continuing to open imagination's door amid an increasingly unpredictable and chaotic world that has entered an era of deeper division since the pandemic.

In Apichatpong Weerasethakul's *A Conversation*

with the Sun (VR) we seem to dive into a cave, or the furthest reaches of a vacuum, with bodies and perceptions augmented by VR technology. Cinematic poetry that transcends words, ripples created by Ryuichi Sakamoto's music, light particles that float in space—there, our sense of time shifts, and a series of singular occurrences that could be described as both dreams and near-death experiences invite us to another world.

On the other hand, fiction itself, which humans have created since times long past, can inspire imagination's door today. Satoko Ichiyama draws from the legend of the Blind Weakling (Shuntokumar), an ancient tale in Japan, and creates a contemporary puppet show that incorporates the Bunraku format while reinterpreting the narrative's structure and tragedy in today's context. Through a queer lens, she fundamentally reinterprets the tragic motifs of the original story, including child abandonment, discrimination against the ill, parent-child strife, and redemption, carrying audience members away to a truer state beyond good and evil.

Uzbeki artist and filmmaker Saodat Ismailova creates parallel worlds from Central Asian myths, folklore, and rituals, as well as found footage from the past. The deserts and ancient ruins of the Silk Road, the cities and people of past and present Islamic worlds, buildings erected in the Soviet era, animals—here, the boundaries between reality and parallel worlds blur and collective memories emerge and vanish, inviting viewers to an astounding level of cinematic beauty.

Nastaran Razawi Khorasani, who emigrated to the Netherlands from Iran as a child, created the solo performance *Songs for no one* based on phone calls with children who live in her home country. The invisible children on the other end of the call appear on stage just through their voices, connecting our imagination to daily life in Iran. Relentlessly harnessing the power of imagination amid restricted freedom, the voices of the children and the artist's vocal performance will surely empower people towards liberation.

Minouk Lim, one of Korea's leading artists, will present a tour performance on a *yakatabune* (a traditional Japanese leisure boat) on the Sumida River and Tokyo Bay, and a simultaneous corresponding exhibition. Participants' bodily sensations and perceptions of boundaries will surely be rearranged through the interplay of music, audio guides, and riverside happenings.

In addition, we will delve into these artists' artistic practices as well as their ideas and the worldviews that inform them through three forums. In Commons Forum #1, we invite two artists who

have roots in Islamic countries to discuss artistic approaches in relation to people made invisible in the past as well as the present, while taking into account the current state of the world. In Commons Forum #2, we hope to deepen our understanding of the relationship between gender and performance as well as society and performativity, bridging the gap between the latest creative practices and theories. In Commons Forum #3, we approach the philosophical and scientific question of "What is reality?" through a conversation between Apichatpong Weerasethakul, whose VR work is included in the program, and neuroscientist Naotaka Fujii.

For this year, we also prioritize conversations and connections that come from gathering and sharing time and space, making up for lost opportunities during the three years of the pandemic. As a new endeavor, we will offer the "Commons Tour," a tour in which participants collectively experience the festival's performances and artist talks. In addition, the tour will provide an opportunity to actively enjoy Theater Commons Tokyo in a range of other ways, including conversations with the guides and fellow tour-goers before and after the performances, as well as photo ops. We hope you will join us in this program.

\*\*\*

To be honest, I am struggling to organize my thoughts and feeling resistant to doing so, no matter what I write here now in mid-January 2024. In a world where people's lives tremble in fear and the earth shakes, we stand in a daze, at a loss what to do. What will the world look like in two months, when Theater Commons Tokyo opens? In a world that is far too unpredictable, this year's Theater Commons Tokyo emerges as a humble common land that, despite the situation, continues to open imagination's door. All I can promise right now is that I will keep that door open.

### Profile

Chiaki Soma | Before establishing Arts Commons Tokyo in 2014, Soma was the inaugural Program Director of Festival/ Tokyo, where she served from spring 2009 to 2013. She has produced or curated global projects that transect categories of theater, contemporary art, and community-engaged art. She was the recipient of the Chevalier de L'Ordre des Arts et des Lettres from France's Minister of Culture in 2015. Since 2017, she has served as the Chairperson of the Theater Commons Tokyo Executive Committee, as well as its Director. She was the Curator for the Aichi Triennale 2019. She is the recipient of Japan's Agency for Cultural Affairs' 71st Minister of Education, Culture, Sports, Science & Technology's Art Encouragement Prize in 2021. Since 2021, she has been the General Producer of Toyooka Theater Festival 2021, the Curator of Aichi Triennale 2022, and the Program Director of Theater der Welt 2023 in Germany.



©NOI CREW

シアターコモンズ '24

Theater Commons Tokyo '24

page

02	開催概要
04	ディレクターズ・ノート
08	目次
09	プログラム
29	会場
30	スケジュール
32	クレジット

page

03	About
06	Director's Note
08	Contents
09	Programs
29	Venues
30	Schedule
32	Credit



©Jörg Baumann

# アピチャップン・ウィーラセタクン [タイ]

## Apichatpong Weerasethakul [Thailand]

VRパフォーマンス

VR performance

## 太陽との対話 (VR)

### A Conversation with the Sun (VR)

#### 日時

3月7日 [木]

18:00/18:30/19:00/19:30/20:00/20:30

3月8日 [金]-11日 [月]

13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/18:00/18:30/19:00/19:30/  
20:00/20:30 \*フォーラムあり (3月10日 [日]、要予約)

3月12日 [火]

13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/18:00/18:30/19:00/19:30

#### 上演時間

約60分

#### 会場

日本科学未来館 1F 企画展示ゾーンb  
〒135-0064 江東区青海2-3-6

#### チケット

一般 | 4,000円

学生 | 3,000円

#### 上演言語

タイ語 (日本語・英語字幕付き)

#### Dates

March 7th [Thu]

18:00/18:30/19:00/19:30/20:00/20:30

March 8th [Fri]-11th [Mon]

13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/18:00/18:30/19:00/19:30/  
20:00/20:30 \*Commons Forum #3 (March 10th [Sun], Booking  
essential.)

March 12th [Tue]

13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/18:00/18:30/19:00/19:30

#### Performance times

Approx. 60 min.

#### Venue

Miraikan - The National Museum of Emerging Science  
and Innovation, 1F Special Exhibition Zone b  
2-3-6 Aomi, Koto-ku, Tokyo 135-0064

#### Ticket

Adults | 4,000 yen

Students | 3,000 yen

#### Language

Thai (with Japanese and English subtitles)

## それは夢か、生命の起源への回帰か？ 記憶と存在の深淵に触れる、アピチャップン監督初のVR作品がついに東京へ。 Is it a dream, or a return to the origin of life? Filmmaker Apichatpong's first VR piece on the depths of memory and existence arrives in Tokyo.

タイの東北地方を舞台に、伝説や民話、個人的な森の記憶や前世のエピソード、時事問題などを題材とした、静謐かつ叙情的な映像作品で知られる映画監督、アピチャップン・ウィーラセタクン。『ブンミおじさんの森』(2010、カンヌ国際映画祭パルム・ドール受賞)、最新作『MEMORIA メモリア』(2021、同審査員賞受賞)など数々の傑作で人類の映画史を更新し続ける存在だ。

本作は、国際芸術祭「あいち2022」からの委嘱を受けて、日本のクリエイターたちとの協働のもと、自身初となるVR技術を使った体験型パフォーマンス作品として制作された。

目には見えない霊的な存在たちとの交感、眠りや病とともにある身体、宙吊りのまま円環する時間感覚——。触れられないもの、見えないもの、聞こえないものこそを独自の映像表現によって体感させてきたアピチャップンの世界は、VR技術によって、仮想空間においても大きく拡張する。言語を超えた映像詩、坂本龍一の音楽が作り出す波動、空間に浮遊する光の粒子たち……。それは夢か、生命の起源への回帰か、それとも臨死体験か？ 私たち観客は、まだ誰も体験したことのない時空に誘われるはずだ。

#### クレジット

構成・演出 | アピチャップン・ウィーラセタクン

音楽 | 坂本龍一

映像制作 | Kick the Machine Films

VRクリエイター | 谷口勝也

初演・制作 | 特定非営利活動法人 芸術公社

初演・共同制作 | 国際芸術祭「あいち2022」、独立行政法人国際交流基金、世界演劇祭 / テアター・デア・ヴェルト2023

主催 | シアター・デア・ヴェルト実行委員会 共催 | 日本科学未来館

特別協力 | シェーン・アケロイド

協力 | 株式会社ライノスタジオ、スカイザバスハウス、ラファエル・ラルコ・エレラ博物館  
機材協賛 | 株式会社STLY

#### プロフィール

アピチャップン・ウィーラセタクン | 1970年タイ・バンコク生まれ。現在はタイ・チェンマイを活動拠点とする。1994年から短編映画やショート・ビデオの制作を始め、2000年に初の長編作品を製作。国際的な映画作家、ビジュアル・アーティストとして知られている。彼の作品は、記憶、アイデンティティ、欲望、歴史をテーマにした非直線的なストーリーテリングを特徴とする。タイ国外で初めて撮影された『Memoria』で2021年カンヌ映画祭審査員賞を受賞。2010年には『ブンミおじさんの森』でカンヌ映画祭パルムドールを受賞。『トロピカル・マラディ』(2004)でカンヌ映画祭の審査員賞、『ブリスフリー・ユアーズ』(2002)で「ある視点」部門最優秀作品賞を受賞。大規模なビデオインスタレーション『プリミティブ』(2009)は、ミュンヘンのハウス・デア・クンストを始め、多くの美術館を巡回した。ドクメンタ13 (2012)に参加したほか、第11回シャルジャ・ビエンナーレ (2013)ではチャイシリとの協働作品が金賞を受賞。同年、福岡アジア文化賞受賞。2016年、チェンマイのMAIAM現代美術館でタイ国内初の大規模個展を開催。近年のインスタレーションに『Constellations』(2018)、『Fiction』(2018)、『SleepCinemaHotel』(2018)、『A Minor History』(2021, 2022)、『Solarium』(2023)などがある。

#### Credit

Concept and Direction | Apichatpong Weerasethakul

Music | Ryuichi Sakamoto

Film Production by Kick the Machine Films

VR Creator | Katsuya Taniguchi

Premier Performance/Produced by Arts Commons Tokyo

Premier Performance/Co-Production | Aichi Triennale 2022, The Japan Foundation, Theater der Welt 2023

Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee

Co-organized by Miraikan - The National Museum of Emerging Science and Innovation  
Special Support | Shane Akeroyd  
Co-operation | RHINO STUDIOS INC., SCAI THE BATHHOUSE, Museo Larco  
Equipment Support | STLY, Inc.

#### Profile

Apichatpong Weerasethakul | Born in Bangkok, Thailand in 1970. He is currently based in Chiang Mai, Thailand. Apichatpong began making films and video shorts in 1994 and completed his first feature in 2000. Apichatpong is recognized as a major international filmmaker and visual artist. His works are characterized by their use of non-linear storytelling, often dealing with themes of memory, identity, desire, and history. His works have won him widespread international recognition and awards, including the Cannes Jury Prize in 2021 for *Memoria*, his first film shot outside of Thailand. He also won the Cannes Palme d'Or in 2010 with *Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives*. His *Tropical Malady* won the Cannes Jury Prize in 2004 and *Blissfully Yours* won the Cannes Un Certain Regard Award in 2002. His large-scale video installation *Primitive* (2009) is a multidisciplinary creation that has toured many museums, including the Haus der Kunst in Munich. He participated in documenta thirteen (2012) and won the Gold Prize at the 11th Sharjah Biennial (2013) for his collaboration with Chai Siris. In the same year, he was awarded the Fukuoka Asian Culture Prize. In 2016, he held his first large-scale solo exhibition in Thailand at the MAIAM Contemporary Art Museum in Chiang Mai. His recent installations include *Constellations* (2018), *Fiction* (2018), *SleepCinemaHotel* (2018), *A Minor History* (2021, 2022), and *Solarium* (2023).



Courtesy of Apichatpong Weerasethakul  
Photo by Supatra Srithongkum and Sutiwat Kumpai





©Jörg Baumann

# Q / 市原佐都子

## Q / Satoko Ichihara

### 弱法師

*Yoroboshi: The Weakling*

演劇公演

Theater

#### 日時

3月8日 [金] 19:00  
 3月9日 [土] 13:00 \*フォーラムあり(要予約) / 19:00  
 3月10日 [日] 14:00 \*ポストトークあり

#### 上演時間

約90分

#### 会場

スパイラルホール  
 〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル3F

#### チケット

一般 | 5,000円  
 学生 | 4,000円  
 \*全席自由席  
 \*本作には性的・暴力的表現が含まれます。  
 \*推奨年齢：16歳以上。

#### 上演言語

日本語 (英語字幕付き)

#### Dates

March 8th [Fri] / 19:00  
 March 9th [Sat] / 13:00 \*Commons Forum #2 (Booking essential.) / 19:00  
 March 10th [Sun] / 14:00  
 \*Talk (after the performance)

#### Performance times

Approx. 90 min.

#### Venue

Spiral Hall  
 3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062

#### Ticket

Adults | 5,000 yen  
 Students | 4,000 yen  
 \*No assigned seating.  
 \*This work contains depictions of sexual and physical violence.  
 \*Recommended minimum age: 16 years.

#### Language

Japanese (with English subtitles)

## 人間の業を人形が担う現代版文楽が、見る者を善悪の彼岸へと誘う。市原演劇の新境地、現代の俊徳丸伝説。

A contemporary Buranku piece, in which dolls take on human karma, leads the audience beyond good and evil. Satoko Ichihara breaks new ground with a contemporary interpretation of the legend of the Blind Weakling (Shuntokumaru).

日本に古くから伝わる説話『俊徳丸伝説』は、能、文楽、歌舞伎、小説など、日本の文学的想像力の源泉となってきた。劇作家・演出家の市原佐都子は、この物語がもつ構造や悲劇性を現代に読み替え、日本の伝統的な文楽の形式を取り入れた、新しい人形劇を創作。そこでは、子捨て、病める身体への差別、親子の葛藤、救済といった原作の悲劇的モチーフが、クリア的な視点から徹底的に読み替えられ、善悪を超えた彼岸へと見る者を誘うだろう。ラブドール、マネキンといった人形たちは人形遣いにより生命を与えられ、人間たちの業や欲望、暴力性を引き受けながら、人間の代理として悲劇を演じる。

義太夫=ナレーターはドイツで活躍する俳優・原サチコ (ハンブルグ劇場所属)、音楽は薩摩琵琶奏者でノイズやエレクトロニカを取り入れた前衛的な表現を行う西原鶴真が担当。巫女のように異なる世界を媒介する二人の声が物語を駆動し、観客の魂を激しく揺さぶるはずだ。

本作品は、世界演劇祭テアター・デア・ヴェルトでの世界初演、高知・城崎での日本初演を経て、シアターコモンズにて東京初演を行う。

#### クレジット

劇作・演出 | 市原佐都子 語り | 原サチコ 音楽・琵琶 | 西原鶴真  
 音楽コーディネイト | 飯島賢一 人形遣い | 大崎晃伸、中西星羅、畑中良太  
 美術 | 中村友美 照明 | 魚森理恵 (kehaiworks)、木内ひとみ  
 音響 | 稲荷森健 映像 | 小西小多郎、片倉康輔 衣装 | キキ花香、奥奈津季  
 人形製作 | 深沢襟、佐藤洋輔、吉田裕梨、小此木謙一郎、佐々木麦帆  
 人形製作協力 | 菅実花 英語字幕・翻訳 | SPRACHSPIEL、阿部幸  
 演出部 | 中村朋子 舞台監督 | 川上大二郎 制作 | 山里真紀子  
 共同製作 | テアター・デア・ヴェルト 2023, Festival d'Automne à Paris, DE SINGEL,  
 高知県立美術館、豊岡演劇祭、シアターコモンズ、城崎国際アートセンター (豊岡市)  
 助成 | 公益財団法人セゾン文化財団  
 主催 | シアターコモンズ実行委員会  
 会場協力 | 株式会社ワコールアートセンター

#### プロフィール

市原佐都子 (いちはら・さとこ) | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2019年『バックスの信女 — ホルスタインの雌』にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場 (チューリヒ) と共同制作した『Madama Butterfly』をチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シュピラート演劇祭、ウィーン芸術週間他にて上演。2023年、『弱法師』を世界演劇祭 (ドイツ) にて初演。

#### Profile

Satoko Ichihara | Playwright, director, novelist and artistic director of KIAC. Ichihara has led the theater company Q since 2011. She writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. In 2011, received the Aichi Arts Foundation Drama Award with the play *Insects*. In 2019, *The Bacchae—Holstein Milk Cows* based on a Greek tragedy, won the 64th Kishida Kunio Playwriting Prize. In 2021, she co-produced *Madama Butterfly* with the Theater Neumarkt (Zurich), which was presented at Zürcher Theater Spektakel, SPIELART Theatre Festival (Munich) and Wiener Festwochen. In 2023, *Yoroboshi: The Weakling* premiered at Theater der Welt 2023 (Frankfurt).

The legend of Shuntokumaru, an ancient tale in Japan, has been a source of inspiration for the Japanese literary imagination, as seen in works of Noh, Bunraku, Kabuki, as well as novels. Playwright and director Satoko Ichihara creates a new puppet show that incorporates the form of traditional Japanese Bunraku while reinterpreting the narrative's structure and tragedy in a contemporary way. She fundamentally reinterprets the tragic motifs of the original story, including child abandonment, discrimination against the ill, parent-child strife, and redemption through a queer lens, leading audience members to a truer state beyond good and evil. The dolls, which include sex dolls and mannequins, come to life through the hands of the puppeteers and perform the tragedy as human proxies, taking on their karma, desires, and violence.

The narrator Gidayu is played by Sachiko Hara, who works in Germany and is an ensemble member at Deutsches Schauspielhaus Hamburg. The music is composed by experimental musician Kakushin Nishihara, a satsuma-biwa player who creates avant-garde sounds that incorporate elements of noise and electronic music. Serving as mediums between distinct worlds as their voices drive the story forward, the two are sure to profoundly move the souls of the audience.

After its world premiere at Theater der Welt 2023 and its Japan premiere at The Museum of art, Kochi and Toyooka Theater Festival, the piece will have its Tokyo premiere at Theater Commons Tokyo.

#### Credit

Direction and Writing | Satoko Ichihara Narrator | Sachiko Hara  
 Music, Biwa | Kakushin Nishihara Music Coordinate | Kenichi Iijima  
 Puppeteer | Terunobu Osaki, Seira Nakanishi, Ryota Hatanaka  
 Stage Design | Tomomi Nakamura Light | Rie Uomori (kehaiworks), Hitomi Kiuchi  
 Sound | Takeshi Inarimori Movie | Kotaro Konishi, Kosuke Katakura  
 Costume | Hanaka Kiki, Natsuki Oku Doll Creation | Eri Fukasawa, Yosuke Sato,  
 Yuna Yoshida, Kenichiro Okonogi, Mugiho Sasaki Doll Creation Support | Mika Kan  
 Translation and Surtitles | SPRACHSPIEL, Sachi Abe  
 Stage Assistant | Tomoko Nakamura Stage Manager | Daijiro Kawakami  
 Production Coordinator | Makiko Yamazato  
 Co-production | Theater der Welt 2023, Festival d'Automne à Paris, DE SINGEL,  
 The Museum of Art, Kochi, Toyooka Theater Festival, Theater Commons Tokyo,  
 Kinosaki International Arts Center (Toyooka city)  
 Supported by The Saison Foundation  
 Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee  
 Venue Support | Wacoal Art Center



©Bea Borgers



©Saodat Ismailova

# サオダット・イズマイロボ [ウズベキスタン/フランス]

Saodat Ismailova [Uzbekistan / France]

映画上映  
Film screening

## 18,000の世界 ほか 18,000 worlds and more

### 日時

3月1日 [金] 18:30-21:00  
3月2日 [土] 11:00-13:30 \*アーティスト・トーク|13:30-15:00 / 15:30-18:00  
3月3日 [日] 11:00-13:30 / 14:00-16:30 \*フォーラムあり(要予約)  
3月9日 [土] 14:00-16:30 / 17:00-19:30  
3月10日 [日] 11:00-13:30 / 14:00-16:30

### 上演時間

約150分

### 会場

東京日仏学院 エスペース・イマージュ  
〒162-8415 新宿区市谷船河原町15 東京日仏学院 2F

### チケット

一般 | 1,000円  
\*全席自由席  
\*シアター・コモンズ'24の以下のプログラムには、本プログラムの鑑賞券が付いております。(別途要予約)  
・アピチャット・ポン・ウィーラセタクン『太陽との対話 (VR)』  
・Q / 市原佐都子『弱法師』  
・ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ『Songs for no one – 誰のためでもない歌』

### Dates

March 1st [Fri] / 18:30-21:00  
March 2nd [Sat] / 11:00-13:30 \*Artist talk|13:30-15:00 / 15:30-18:00  
March 3rd [Sun] / 11:00-13:30 / 14:00-16:30  
\*Commons Forum #1 (Booking essential.)  
March 9th [Sat] / 14:00-16:30 / 17:00-19:30  
March 10th [Sun] / 11:00-13:30 / 14:00-16:30

### Performance times

Approx. 150 min.

### Venue

Institut français de Tokyo, Espace images  
2F, Institut français de Tokyo, 15 Ichigaya-Funagawara-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8415

### Ticket

Adults | 1,000 yen  
\*No assigned seating.  
\*The following programs at Theater Commons Tokyo '24 include a ticket for this program. (Reservations required)  
- Apichatpong Weerasethakul *A Conversation with the Sun (VR)*  
- Q / Satoko Ichihara *Yoroboshi: The Weakling*  
- Nastaran Razawi Khorasani *Songs for no one*

## 中央アジアの女性たちが語り継ぐ複数の異世界。境界から立ち現れる共同体の記憶への旅。

Parallel worlds passed down through stories by women of Central Asia. A journey through the collective memories that emerge from the boundaries.

ウズベキスタン出身の映像作家・アーティスト、サオダット・イズマイロボ。2022年ヴェネチア・ビエンナーレおよびドクメンタ15に出展、2023年にはアムステルダムEye Film Museumで個展を開催するなど、世界中で大きな注目を集めている。

彼女のカメラが捉えるのは、ウズベキスタンの砂漠や古代遺跡、過去と現在のイスラーム世界の都市と人々、動物たち、旧ソ連時代に建設された建物群など、ウズベキスタンの風景そのものだ。その中で、中央アジアに伝わる神話や民話、儀式や風習が、世代を超えた女性たちによって静かに語られ、演じられていく。そこでは現実と異世界の境界が曖昧になり、集団的な記憶が立ち現れては消え、圧倒的な映像美が見るものを誘う。

今回のシアター・コモンズでは、近年の代表作一挙5作品の日本初上映が日本語字幕付きで実現する。1930年代から80年代のウズベキスタンの長編映画やソ連時代のプロパガンダ映画をコラージュした『彼女の権利』、イスラーム神秘主義の宇宙観から着想を得た2023年の最新作『18,000の世界』、ドクメンタで話題を集めた中央アジアのシンデレラ物語『ビビ・セシャンベ』など、私たちが異世界へと誘う作品群は、見るものの網膜と脳内に静かな革命をもたらすに違いない。

### 上演言語

日本語字幕付き

### クレジット

監督・シナリオ・撮影|サオダット・イズマイロボ  
会場協力|東京日仏学院

### プロフィール

サオダット・イズマイロボ|タシケントとパリを拠点に活動。タシケント国立芸術学院とフランスのル・フレノワで学ぶ。ポスト・ソビエト時代に誕生した中央アジアのアーティスト第一世代の重要な発言者として知られる。2004年に発表したドキュメンタリー映画『アラル。Fishing in an Invisible Sea』(カルロス・カサスと共に制作)はトリノ映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞。シネファウンデーションの支援を受けた長編映画『沈黙の40日』(2014)はベルリン国際映画祭でプレミア上映され、カンヌ国際映画祭に出品。2013年のヴェネチア・ビエンナーレで初のビデオインスタレーションを発表し、2022年には同芸術祭のメイン展示『The Milk of Dreams』に作品が選出された。ドクメンタ15(2022)では、中央アジアのアーティスト・コレクティブ「ダヴラ」を立ち上げた。イズマイロボの作品は、ボンビドゥー・センター、アムステルダム・ステデリック美術館、アルマトイ近代美術館などに收藏されている。

Saodat Ismailova is an artist and filmmaker from Uzbekistan. She has received worldwide attention, having shown in the 2022 Venice Biennale as well as documenta fifteen. A retrospective exhibition of her work was held at the Eye Film Museum in Amsterdam.

Ismailova's camera captures the very landscape of Uzbekistan: the deserts and ancient ruins of the Silk Road, the cities of the Islamic world, past and present, and buildings erected in the Soviet era. Within this landscape, Central Asian myths and folklore, rituals and customs, are quietly passed down and performed by women across generations. There, the boundaries between reality and parallel worlds blur, and collective memories emerge and vanish.

Five major works from recent years will screen for the first time in Japan, with Japanese subtitles, at this year's Theater Commons Tokyo. Included in the program are *Her Right*, a collage of Uzbek feature films from the 1930s to 1980s depicting women and their customs, *18,000 worlds*, a new work from 2023 which is inspired by the cosmology of Islamic mysticism, and *Bibi Seshanbe*, a Central Asian Cinderella story that drew much attention at documenta. By inviting us into parallel worlds, these films are sure to incite quiet revolutions in our eyes and minds.

### Language

Subtitled in Japanese

### Credit

Direction, Writing and Editing|Saodat Ismailova  
Venue Support|Institut français de Tokyo

### Profile

Saodat Ismailova|Saodat Ismailova lives and works in Tashkent and Paris. She is recognized as an important voice of the first generation of Central Asian artists who came of age in the post-Soviet era. She studied at the Tashkent State Art Institute and Le Fresnoy in France. In 2004 her documentary *Aral. Fishing in an Invisible Sea* (which she made with Carlos Casas) won Best Documentary at the Turin Film Festival. Her feature film *40 Days of Silence* (Chilla, 2014), supported by Cinefoundation, premiered at Berlinale Forum and was selected for Cannes Film Festival. In 2013 she presented her first video installation at the Venice Biennale, and in 2022 her work was selected for *The Milk of Dreams*, the main exhibition at the Venice Biennale. In response to her selection for documenta fifteen, she initiated research group Davra to support, develop and empower voices from Central Asia. Works by Ismailova are in the collections of museums including Centre Pompidou, Stedelijk Museum Amsterdam and Almaty Museum of Modern Art.



©Rinat Karimov





©Julian Maiwald

# ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ

[イラン／オランダ]

Nastaran Razawi Khorasani [Iran / the Netherlands]

## Songs for no one – 誰のためでもない歌 Songs for no one

### 日時

3月2日 [土] 14:30

\*ポストトークあり

3月3日 [日] 14:30

\*フォーラムあり (要予約)

### 上演時間

約60分

### 会場

ゲーテ・インスティトゥート東京

〒107-0052 港区赤坂7-5-56

### チケット

一般 | 3,500円

\*全席自由席

### Dates

March 2nd [Sat] / 14:30

\*Talk (after the performance)

March 3rd [Sun] / 14:30

\*Commons Forum #1 (Booking essential.)

### Performance times

Approx. 60 min.

### Venue

Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

### Ticket

Adults | 3,500 yen

\*No assigned seating.

### 演劇公演

### Theater

## イランに生きる子どもたちとの秘密の通話から、 未来を照らす歌が立ち上がる。

A hopeful song for the future emerges from telephone conversations with children in Iran.

ロッテルダムを拠点に活動するアーティスト、ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ。オランダのマーストリヒト演劇アカデミーを卒業後、アムステルダム国際劇場などで作品を発表。オランダ演劇祭2014では、Gouden Krekel賞最優秀演技賞を受賞、2020年にはオランダ・ダンス・フェスティバルのヤング・オーディエンス賞にノミネートされるなど活躍が目覚ましい。

幼少期に難民としてイランからオランダに移住したホラーサーニ。今回初来日公演となる『Songs for no one – 誰のためでもない歌』は、祖国イランに暮らす子どもたちとの通話から生み出されたパフォーマンスだ。受話器の向こうの不可視の子どもたちは、ペルシア語での問いかけに、好きなゲームや音楽、学校生活や家族など、他愛もない日常を語り出す。独裁政権下で制限された自由の中でも、想像力を広げ未来を語る子どもたちに向けて、アーティストは自ら詩を書き、作曲した歌とパフォーマンスで応答する。それは人々の想像力と自由を鼓舞する、未来へのエンパワーメントともなり得るだろう。

### 上演言語

ペルシア語 (英語・日本語字幕付き)

### クレジット

構成・演出・出演 | ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ  
音楽 | ジミ・ズット、ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ  
ドラマトゥルギー | トビアス・コケルマンス  
舞台美術・映像 | ベーター・ファン・ティル (BrotherTill)  
指導 | スザン・ボーハールト  
衣装コンサルタント | レベッカ・ヴェルマン  
技術 | アンドレ・ゴース (Denzo Theater Techniek)、アンディ・トウィルト  
制作 | エリス・デ・フォーイ、ナディーーン・ダイクストラ  
マネジメント | シェリル・ムーネン、ウィルマ・クイト  
マーケティング | ディケ・ファン・デル・スベック、レオニ・ポート  
写真 | モスタファ・ヘラヴィ  
グラフィックデザイン・画像編集 | マールチェ・デ・グルート  
舞台写真 | ジュリアン・マイワルド  
字幕翻訳 | 辻 絵麻  
字幕翻訳 | テリー・エズラ

会場協力 | ゲーテ・インスティトゥート東京

助成 | オランダ王国大使館

### プロフィール

ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ | マーストリヒト演劇アカデミー卒業。2014年、最も印象的なステージパフォーマンスに贈られるGouden Krekel賞を受賞。2020年にはthe Nederlandse Dansdagenにて若い観客のためのダンス賞にノミネートされた。『Songs for no one – 誰のためでもない歌』は、BNG Bank Theater awardを2度受賞 (2020年と2021年) し、Flemish Theater Festival及び、フランクフルト-オッフエンバッハの2都市で開催されたテアター・デア・ヴェルト2023に選出された。2023年にはGieskes-Strijbis Podium Prizeにノミネートされた。

Nastaran Razawi Khorasani is an artist based in Rotterdam. She is as a performance maker and performer and has presented work at the Internationaal Theater Amsterdam, among other venues. In recognition of her remarkable practice, she won the Gouden Krekel award for the most impressive stage performance of the year at the Netherlands Theater Festival 2014, in 2020 she was nominated for the award for dance for young audiences at the Nederlandse Dansdagen and in 2023 she was nominated for the Gieskes-Strijbis Podium Prize.

Razawi Khorasani relocated to the Netherlands from Iran as a child refugee. *Songs for no one*, staged for the first time in Japan at this festival, is a performance born from phone conversations with children who live in the artist's home country of Iran. Answering questions asked in Farsi, invisible children on the other side of the receiver talk about their favorite games and music, their school life and family, and other banal details about their life. The children imaginatively speak of their future, despite the constraints on their freedom imposed by the dictatorship. Razawi Khorasani responds with lyrics and music she has written herself. The performance is sure to become a source of empowerment for the future, rousing people's imagination and sense of freedom.

### Language

Farsi (with English and Japanese subtitles)

### Credit

Concept, Direction and Performance | Nastaran Razawi Khorasani  
Music | Jimi Zoet, Nastaran Razawi Khorasani  
Dramaturgy | Tobias Kokkelmans  
Stage Design and Video | Peter van Til (BrotherTill)  
Coach | Suzan Boogaerd  
Costume Consultant | Rebekka Wörmann  
Technology | André Goos (Denzo Theater Techniek), Andy Twilt  
Production | Elise de Fooij, Nadine Dijkstra  
Management | Cheryl Moenen, Wilma Kuite  
Marketing | Dieke van der Spek, Leonie Poot  
Photo | Mostafa Heravi  
Graphic Design and Image Editing | Maartje de Groot  
Stage Photography | Julian Maiwald  
Translation Surtitles into Japanese | Emma Tsuji  
Translation Surtitles into English | Terry Ezra

Venue Support | Goethe-Institut Tokyo

Supported by Embassy of the Kingdom of the Netherlands

### Profile

Nastaran Razawi Khorasani | Nastaran Razawi Khorasani is a graduate of Maastricht Institute of Performative Arts. In 2014 she won the Gouden Krekel award for most impressive stage performance. In 2020 she was nominated for the award for dance for young audiences of the Nederlandse Dansdagen. Her show *Songs for no one* twice received the BNG Bank Theater award (in 2020 and 2021) and was selected for the 2022 Flemish TheaterFestival and Theater der Welt in Frankfurt-Offenbach. In 2023 she was nominated for the Gieskes-Strijbis Podium Prize.



©Julian Maiwald



©Minouk Lim

# イム・ミヌク [韓国] Minouk Lim [Korea]

## Hyper Yellow

### 日時

展覧会「Hyper Yellow」  
プレビュー | 2月29日 [木] 16:00  
本会期 | 3月1日 [金] - 12日 [火] 12:00-20:00

パフォーマンス「S.O.S – 走れ神々」 |  
3月2日 [土]、3日 [日] 17:00-18:30

トークイベント | 3月4日 [月] 17:00-18:30 (開場16:30)

### 上演時間

パフォーマンス | 約90分  
トークイベント | 約90分

### 会場

展覧会 | 駒込倉庫  
〒170-0003 豊島区駒込2-14-2  
パフォーマンス | 隅田川屋形船(「越中島棧橋」発着)  
江東区越中島1丁目先 越中島公園内  
トークイベント | (株)大林組30階レセプションルーム  
〒108-8502 港区港南2-15-2 品川インターシティB棟30F

### チケット

展覧会 | 入場無料・予約不要  
パフォーマンス | 入場無料・要抽選予約 (抽選方式)  
トークイベント | 入場無料・要抽選予約 (抽選方式)

## 都市・東京の流動的な境界を探る旅。 韓国を代表するアーティスト、イム・ミヌクによる、 水上パフォーマンスツアーと展覧会。

An exploration of the fluid boundaries of the city, of Tokyo.  
A boat-tour performance and exhibition by leading Korean artist, Minouk Lim.

韓国を代表するアーティスト、イム・ミヌク。芸術と政治、過去と現在、個人と共同体を横断しながら、現代社会では忘れられ隠された声や存在を様々な手法で呼び起こす創作活動は、世界のアートシーンはもちろん、日本でも瀬戸内国際芸術祭2016、あいちトリエンナーレ2019などで継続的に紹介されてきた。

彼女は今回、公益財団法人大林財団の《都市のヴィジョン》制作助成を受け、2年間におよぶ日本でのリサーチとクリエイションの成果として、隅田川と東京湾周辺を屋形船で周遊する水上パフォーマンスツアーと駒込倉庫での展覧会を同時開催する。タイトルの「Hyper Yellow」、つまり「黄色を超越した」状態とは、特定の色や人種を指す言葉を超え、どこにも存在しないが、どこにでも存在する、壊れやすい境界や関係を表すという。まさに境界を流動的に超えて体験するパフォーマンスツアーは、屋形船の中に流れる音楽やガイド、川辺で行われる出来事の交錯によって、歴史、国家、信仰、そして生態学的・地理的感覚が再編される旅となるはずだ。

### 上演言語

日本語、英語、韓国語

### クレジット

展示「Hyper Yellow」  
キュラトリアルリサーチ／プロジェクトマネジメント | 権祥海、チェ・ユウン (韓国)  
制作 | azymkim 撮影 | イム・ソンジュン 映像制作 | イ・ウンソル  
グラフィックデザイン | Studio Hik

### パフォーマンス「S.O.S – 走れ神々」

構成・演出 | イム・ミヌク  
出演 | 塩澤嘉奈子、ジョ・ヘジョン、徳安慶子、三島早稀、好光義也、レモニエ・ジョン  
キュラトリアルリサーチ／プロジェクトマネジメント | 権祥海 音楽演出 | チャン・ヨンギョ  
音響演出 | オ・ヨンファン 技術スタッフ | 庄子渉 制作 | 武田侑子 映像撮影 | 嶺隼樹  
制作記録 | カク・ソジン 協力 | 江戸前汽船株式会社

主催 | 公益財団法人大林財団  
助成 | 都市のヴィジョン - Obayashi Foundation Research Program  
広報・協力 | シアターコモンズ実行委員会 (事務局 : NPO法人芸術公社)

### プロフィール

イム・ミヌク | アーティスト。映像、インスタレーション、パフォーマンス、音楽など、様々な表現手段を取り入れながら思考の幅を拡張し、多様な作品を制作。急速な社会経済的な発展、再開発とその結果として生じるコミュニティの移動など、社会、マスメディア、政治と市民の関係といったテーマに、長期的に取り組む。その創作は、歴史の喪失、断絶、抑圧されたトラウマを想起させる。また、言語活動、あるいは表現の政治学に基づくパフォーマンス的なオブジェやインスタレーションにおいては、過去の出来事の単なる再現ではなく、構造から立ち現れる非人間的な視線の存在を想像させ、気づかせることで、経験、記憶、感情を呼び覚ます。観客をパフォーマンスツアーとして組み込んだ演劇的ともいえる参加型の作品などもあり、表現方法は多様である。2014年より韓国芸術総合大学で教鞭を取る。

Minouk Lim is one of Korea's leading artists. Traversing art and politics, the past and the present, the individual and collective, her work employs various methods to awaken forgotten and hidden voices and beings in contemporary society. Lim's work has been shown continuously on the international art scene, including in Japan at the Setouchi Triennale 2016 and Aichi Triennale 2019.

Lim was awarded the Visions of the City - Obayashi Foundation Research Program grant and, as the culmination of two years of research and production in Japan, she will simultaneously present a tour performance on a *yakatabune* (a traditional Japanese leisure boat) on the Sumida River and Tokyo Bay, and an exhibition at Komagome SOKO. The title, *Hyper Yellow*, which points to a color that transcends descriptions of a specific shade or race, represents the fragile boundaries and relationships that exist nowhere and everywhere. In this tour performance where viewers will fluidly transcend boundaries, notions of history, nation, faith, ecology and geography are rearranged through the interplay of music, audio guides, and riverside happenings.

### Language

Japanese, English, Korean

### Credit

Exhibition *Hyper Yellow*  
Curatorial Research/Project Management | Sanghae Kwon, Youeun Choi (Korea)  
Production | azymkim Camera | Sungjoon Lim Video Production | Eunsol Lee  
Graphic Design | Studio Hik

Performance *S.O.S – Run Shin Shin*  
Concept and Direction | Minouk Lim  
Cast | Kanako Shiozawa, Hyejung Jo, Keiko Tokuyasu, Saki Mishima, Yoshiya Yoshimitsu, Jean Lemonnier  
Curatorial Research/Project Management | Sanghae Kwon  
Music Direction | Younggyu Jang Sound Direction | Younghoon Oh  
Technical Staff | Wataru Shoji Production | Yuko Takeda Filming | Junki Mine  
Production Documentation | Sojin Kwak Co-operation | Edomaekisen Corporation

Organized by The Obayashi Foundation  
Supported by Visions of the City - Obayashi Foundation Research Program  
PR Support | Theater Commons Tokyo Executive Committee (Administrative Office | Arts Commons Tokyo)

### Profile

Minouk Lim | Minouk Lim (b. 1968) is an artist of many forms and has been creating works that are beyond the boundary of different genres and media, deepening the scope of questions while encompassing writing, music, video, installation, and performance as her modes of artistic expression. Lim's practice recalls historic losses, ruptures, and repressed traumas. Rooted in language, and specifically, the politics of expression, her work does not replay past events, rather, they elevate the experiences, memories, and feelings through the means of imagining or engaging structural beings of non-human witnesses in her performative sculptural objects and installations.







## コモンズ・ツアー Commons Tour

### 日時

ツアーA | 3月2日 [土]、3日 [日]

ナビゲーター | 岩田智哉 (キュレーター)

鑑賞プログラム |

・サオダット・イズマイロポ『18,000の世界』ほか

・ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ

『Songs for no one – 誰のためでもない歌』

・イム・ミヌク 展覧会『Hyper Yellow』、パフォーマンス『S.O.S – 走れ神々』

・コモンズ・フォーラム#1

ツアーB | 3月9日 [土]、10日 [日]

ナビゲーター | 山田カイル (劇作家、演出家、ドラマトゥルク)

鑑賞プログラム |

・アビチャップン・ウィーラセタクン『太陽との対話 (VR)』

・Q / 市原佐都子『弱法師』

・サオダット・イズマイロポ『18,000の世界』ほか

・イム・ミヌク 展覧会『Hyper Yellow』

・コモンズ・フォーラム#2、#3

### 参加費

要予約 各ツアー

一般 | 15,000円

U25 | 13,000円

\*鑑賞プログラムの予約及びチケット代含む

(ツアーB「コモンズ・フォーラム#3」については、日本科学未来館にて開催する無料イベントのため別途予約が必要となります。詳細はツアーご予約後にご案内いたします。)

### Dates

Tour A | March 2nd [Sat], 3rd [Sun]

Navigator | Tomoya Iwata (Curator)

Programs |

- 18,000 worlds and more by Saodat Ismailova

- Songs for no one by Nastaran Razawi Khorasani

- Exhibition *Hyper Yellow* and performance *S.O.S – Run Shin Shin* by Minouk Lim

- Commons Forum #1

Tour B | March 9th [Sat], 10th [Sun]

Navigator | Kyle Yamada (Playwright, Director, Dramaturg)

Programs |

- *A Conversation with the Sun (VR)* by Apichatpong Weerasethakul

- *Yoroboshi: The Weakling* by Q / Satoko Ichihara

- 18,000 worlds and more by Saodat Ismailova

- Exhibition *Hyper Yellow* by Minouk Lim

- Commons Forum #2, #3

### Participation Fee

Booking essential for each tour.

Adults | 15,000 yen

U25 | 13,000 yen

\*Ticket and reservation fees for the program are included.

(Admission to Commons Forum #3 in Tour B, which will be held at Miraikan, is free but reservations are required. We will provide further details after you reserve a ticket.)

### ツアー

#### Tour

## シアターコモンズ'24を集団でアクティブに楽しむ土日集中ツアー。 作品鑑賞はもちろん、トークあり、対話あり、記念撮影あり!

A jam-packed group tour of Theater Commons Tokyo '24.

Enjoy a weekend of programs, talks, conversations, and photo ops!

シアターコモンズ'24の複数のプログラムを、効率的に集団で楽しむ2日間の集中ツアーを開催する。会期前半、後半それぞれの土日で集中的に作品鑑賞をするだけでなく、観劇前のイントロトーク、観劇後のポストトーク、ナビゲーターや参加者同士でのおしゃべり、交流会、記念撮影など、グループツアーならではの盛りだくさんな内容となっている。各ツアーのナビゲーターには、キュレーターの岩田智哉 (ツアーA)、劇作家、演出家、ドラマトゥルクの山田カイル (ツアーB)を迎え、対話や交流を通じて参加者とともにシアターコモンズの体験を深めていく。このツアーを契機に、世代やジャンルを超えたアクティブな観客コミュニティが、新たに生成されていくかもしれない。

### 定員

各ツアー30名 (先着順)

### 上演言語

日本語

### 注意事項

\*本ツアーには食事の提供、宿泊・交通の手配および費用は含まれません。

\*休憩時間に飲食可能な場所等について、ご予約後にご案内いたします。

\*各会場間の移動は徒歩と電車を予定しています。交通系ICカードにチャージの上ご参加ください。

\*ツアースケジュールの詳細については変更が生じる場合がございます。詳細はご予約後にご案内いたします。

### クレジット

主催 | シアターコモンズ実行委員会

### プロフィール

岩田智哉 (いわた・ともや) | 1995年愛知県生まれ。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修了。キュレーション史やキュレーターなど、キュラトリアル・スタディーズを研究する一方、広く人間を超えた他者との理解可能性／不可能性について展覧会実践を通して模索。また、アジア各地のオルタナティブ・スペースを訪れ、それぞれのローカルなアートシーンにおけるオルタナティブとインスティテューションのダイナミズムについてのリサーチを行う。2022年4月より、キュラトリアル・スペースThe 5th Floorのディレクター。

山田カイル (やまだ・かいる) | 劇作家、演出家、ドラマトゥルク。抗原劇場代表。1993年テキサス生まれ、その後青森で育つ。大学院在籍中にダンスドラマトゥルクとしてキャリアをスタートし、修了後、自身の演劇活動を始動。近作に、小栗判官の伝説を現代に翻案した『熊野ヒッチハイク・ガイド』、ダンサー・振付家の木村玲奈と共に岩手県宮古市の民話をリサーチし上演した『夜明けの国のココロ・ドゥール・ドゥー』、人類滅亡後の世界を動物や超常的な存在のモノローグで語る『雨降らす巫女の定置網漁』など。またArt Translators Collectiveのメンバーとして通訳／翻訳業も行っている。

The Commons Tour is an efficient way to enjoy multiple programs at Theater Commons Tokyo '24 during an intensive two-day group tour. The tour will be held on both weekends during the festival period and, in addition to tickets to the programs, offers activities only available for participants, including intros and post-performance talks, conversations with the guides and fellow tour goers, mixers, and photo ops. The tours are guided, respectively, by curator Tomoya Iwata (Tour A) and playwright, director and dramaturg Kyle Yamada (Tour B), who will help deepen the Theater Commons experience through conversation and exchange. The Commons Tour has the potential to create a new, active audience community that transcends generations and genres.

### Capacity

30 persons per tour (first-come-first-served basis)

### Language

Japanese

### Please note

- Meals, accommodation, and travel costs are not included as part of the tour.

- We will provide information on places to eat during break times once you reserve a ticket.

- The travel between each venue will be possible by foot or train. Please charge your IC card in advance of participation.

- Details of the tour schedule are subject to change. We will provide further details after you reserve a ticket.

### Credit

Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee



Photo by Linda Bujoli







©Saodat Ismailova

# コモンズ・フォーラム #1

## Commons Forum #1

フォーラム

Forum

### 複数の世界、歴史、物語 ——多声的芸術はいかに可能か？

*Multiple worlds, histories, and stories—Is polyphonic art possible?*

**日時**

3月3日 [日] 16:00-18:00

**Date**

March 3rd [Sun] / 16:00-18:00

**上演時間**

120分

**Performance times**

120min.

**会場**

ゲーテ・インスティテュート東京  
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

**Venue**

Goethe-Institut Tokyo  
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

**参加方法**

無料・要予約

**How to participate**

Free / Booking essential.

**上演言語**

英語 (日本語通訳付き)

**Language**

English (with Japanese interpretation)

世界の難民・避難民が人類史上はじめて、1億人を超えた。またこの半年の間に、中東や欧州で継続中の戦争や対立が激化し、芸術の世界にも劇的な分断をもたらしている。敵か味方か、正義が悪か、被害か加害か。止めることのできない暴力はこうした二項対立的思考を煽り、対話の回路をさらなる暴力で粉砕してしまう。またその「正義」のカテゴリーからはみ出るリスクを回避するあまり、他者の権利や自由さえも「正義」によって抑圧される事態が起きている。「芸術は可能か?」という問いさえも虚しく感じられる現在の世界において、それでも芸術家を取りうるアプローチとはどのようなものか。子ども時代に難民としてイランから欧州に移住したナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ、シルクロード、イスラーム、旧ソ連がクロスする故郷ウズベキスタンを撮り続けるサオダット・イズマイロボらの声を聞きながら、複数の世界とその歴史、そこからこぼれ落ちてきた声や存在に、私たちはどう触れることができるのだろうか。

**クレジット**

主催 | シアターコモンズ実行委員会  
会場協力 | ゲーテ・インスティテュート東京

**登壇者 / Panelists**

サオダット・イズマイロボ | 映像作家、アーティスト  
—  
Saodat Ismailova | Filmmaker, Artist

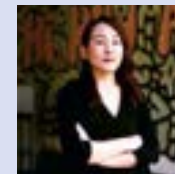


©Rinat Karimov

藤井光 (ふじい・ひかる) | 芸術は社会と歴史と密接に関わりを持って生成されるという考え方のもと、世界各地の歴史や出来事を綿密にリサーチし、今日の社会課題に回答する作品を、主に映像インスタレーションとして制作している。その方法論は、各分野の専門家との領域横断的かつ芸術的協働をもたらす交点としての議論の場を作り出すなど、過去と現代を複層的につなぎ歴史や社会の不可視な領域を構造的に批評する試みを行っている。近年では、第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ (2021)、森美術館開館20周年記念展「ワールド・クラスルーム」(2023) などに参加し、2020年Tokyo Contemporary Art Award 2020-2022を受賞。

**司会 / Moderator**

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ ディレクター  
—  
Chiaki Soma | Director of Theater Commons Tokyo



©NÓI CREW

The number of refugees and otherwise displaced people has exceeded 100 million for the first time in human history. In these past six months, ongoing wars and conflicts have intensified in the Middle East and Europe, producing sharp divides in the art world as well. Enemy or ally. Good or evil. Victim or aggressor. Unstoppable violence fuels binary thinking that shatters channels for dialogue. There are even cases of people trying so hard to avoid the risk of falling outside this category of “good” that people’s rights and freedoms are suppressed.

How can artists approach artmaking today, in a world where it feels pointless to even ask, “Is art possible?” This forum will feature Nastaran Razawi Khorasani, who left Iran for Europe as a refugee during her childhood, and Saodat Ismailova, who films her home country of Uzbekistan, where the Silk Road, Islamic world, and former Soviet Union intersect. Listening to their voices, how might we access multiple worlds and their histories, and the voices and beings that spill out from them?

**Credit**

Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee  
Venue Support | Goethe-Institut Tokyo

ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ | アーティスト  
—  
Nastaran Razawi Khorasani | Artist



©Julian Maiwald

Hikaru Fujii | Hikaru Fujii’s practice is based on the notion that artistic production implies a close relationship with society and history. Mainly in the form of video installation, he creates work that responds to contemporary social issues through detailed research and fieldwork on unique cultures and histories of various countries and regions. Fujii organizes a place for discussion—intersections for interdisciplinary and artistic collaboration between specialists from diverse fields. His methodology links the present with the past in multilayered ways, while structurally critiquing the domains of history and society that remain invisible. In recent years, he has participated in the 10th Asia Pacific Triennale (2021), the Mori Art Museum 20th Anniversary Exhibition *WORLD CLASSROOM* (2023), and received the “Tokyo Contemporary Art Award 2020-2022” in 2020.



©Shunta Ishinami\_ WORKSIGHT





©Aya Momose

## コモンズ・フォーラム #2 Commons Forum #2

フォーラム

Forum

### ジェンダーとパフォーマンスの現在地 Gender and performance today

**日時**  
3月9日 [土] 15:00-17:00

**上演時間**  
120分

**会場**  
スパイラルホール ホワイエ  
〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル 3F

**参加方法**  
無料・要予約

**上演言語**  
日本語

**クレジット**  
主催 | シアターコモンズ実行委員会  
会場協力 | 株式会社ワコールアートセンター

**Date**  
March 9th [Sat]/15:00-17:00

**Performance times**  
120 min.

**Venue**  
Spiral Hall Foyer  
3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062

**How to participate**  
Free / Booking essential.

**Language**  
Japanese

**Credit**  
Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee  
Venue Support | Wacoal Art Center

世界経済フォーラムが発表した「ジェンダー・ギャップ指数」が、2023年現在146カ国中125位という日本。その危機感が可視化される中、ここ数年の間に、各所でフェミニズム的なアプローチの作品や活動が増加し、家父長制的な価値観や構造的な性差別に対する問題提起がなされてきた。

本フォーラムでは、男性中心的に作られてきたジェンダー観を意図的に脱臼し、そこに隠された権力や偏見、欲望を揺さぶるようなラディカルな表現を続けるアーティストたちの作品や活動にフォーカスする。また社会学者の清水知子氏を迎え、クィア理論やジェンダー論と社会的なパフォーマンスの相関関係について、最新の研究動向も踏まえた議論をしていく。

**登壇者 / Panelists**

市原佐都子 (いちはら・さとこ) | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督

Satoko Ichihara | Playwright, director, novelist and artistic director of Kinosaki International Arts Center (KIAC)



©Bea Borgers

百瀬文 (ももせ・あや) | 1988年東京都生まれ。パフォーマンスを記録するための方法としてビデオを扱い始め、映像によって映像の構造を再考させる自己言及的な方法論を用いながら、他者とのコミュニケーションの複雑性を扱う。近年は映像に映る身体の問題を取り上げながら、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。主な個展に「百瀬文口を寄せる」(十和田市現代美術館、2022)、主なグループ展に国際芸術祭「あいち2022」(愛知芸術文化センター、2022)、「フェミニズムズ/FEMINISMS」(金沢21世紀美術館、2021)、主なパフォーマンス作品に『鍼を打つ』(シアターコモンズ'21)、『クローラー』(国際芸術祭「あいち2022」)など。2016年度アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨークに滞在。第34回(2023年度)タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞受賞。

In 2023, Japan ranked 125th among 146 countries in the World Economic Forum's *Global Gender Gap Report*. As this sense of crisis becomes visible, patriarchal values and structural sexism are being questioned by an increasing number of activities, including artworks, taking on feminist approaches.

This forum will focus on works that intentionally dismantle male-dominated perspectives on gender to reveal radical forms of expression that destabilize ideas of power, prejudice, and desire. Sociologist Tomoko Shimizu will also join to discuss the correlation between queer theory, gender theory, and social performance while considering the latest trends in research.

Aya Momose | Born 1988 in Tokyo. Using video as a method to record the performance, by employing a self-referential methodology that reconsiders the structure of moving image via moving image itself, Momose's work deals with the multi-layered complexity of communication with the other. Focusing on bodies appearing in moving images, her recent practice further questions sexuality and gender. Her solo exhibitions include *Interpreter*, Towada Art Center (2022), selected group shows include Aichi Triennale 2022, Aichi Arts Center (2022); *FEMINISMS*, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa (2021) and performance works include *Performing Acupuncture*, Theater Commons Tokyo '21 (2021); and *Crawler*, Aichi Triennale 2022 (2022). Momose has participated in an artist residency program in New York sponsored by the Asian Cultural Council (ACC). She received the 34th Takashimaya Art Award from the Takashimaya Cultural Foundation (2023).

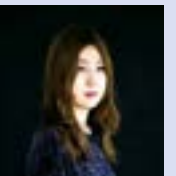


Photo: 金川晋吾

清水知子 (しみず・ともこ) | 愛知県生まれ。現在、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授。専門は文化理論、メディア文化論。著書に「文化と暴力—揺曳するユニオンジャック」(月曜社)、『ディズニーと動物—王国の魔法をとく』(筑摩選書)、共訳書にジュディス・バトラー『アセンブリ—行為遂行性・複数性・政治』(青土社)、『非暴力の力』(青土社)、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『叛逆』(NHK出版)、デイヴィッド・ライアン『9・11以後の監視』(明石書店)他。

Tomoko Shimizu | Born in Aichi. Associate Professor of Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts. Her research interests are media and cultural theory. She is the author of *Culture and Violence: The Unravelling Union Jack* (Getsuyosha), and *Disney and Animals: Breaking the Spell of Magic Kingdom* (Chikuma Shobo). Her co-translation works include: *Notes Toward a Performative Theory of Assembly* by Judith Butler, *The Force of Nonviolence* by Judith Butler, *Declaration* by Antonio Negri and Michael Hart, and *Surveillance after September 11* by David Lyon.



**司会 / Moderator**

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ ディレクター

Chiaki Soma | Director of Theater Commons Tokyo



©NÓI CREW



©Jörg Baumann

# コモンズ・フォーラム #3

## Commons Forum #3

フォーラム

Forum

### 「現実」とは何か？ ——アピチャップン・ウィーラセタクン＋藤井直敬の対話

*What is reality?  
A conversation between Apichatpong Weerasethakul and Naotaka Fujii*

**日時**  
3月10日 [日] 16:30-18:00

**上演時間**  
90分

**会場**  
日本科学未来館 7F イノベーションホール  
〒135-0064 江東区青海2-3-6

**参加方法**  
無料・要予約

**上演言語**  
日本語 (英語通訳付き)

**Date**  
March 10th [Sun]/16:30-18:00

**Performance times**  
90 min.

**Venue**  
Miraikan - The National Museum of Emerging Science and Innovation, 7F Innovation Hall  
2-3-6 Aomi, Koto-ku, Tokyo 135-0064

**How to participate**  
Free / Booking essential.

**Language**  
Japanese (with English interpretation)

私たちが日常的に体験していると信じている「現実」とは何か？ 発展著しいXR技術は、私たちの知覚や現実の認識を確実に揺さぶり、書き換えながらも、人間に、「現実」とそうでないものの境界線を問いかけている。映画監督アピチャップン・ウィーラセタクンが日本のVRクリエイターたちと手がけた体験型パフォーマンス『太陽との対話 (VR)』は、私たちの無意識な記憶の奥底に眠っている感覚に触れ、生命の根源や死というものを、太陽の動きに重ねながら経験する特異なパフォーマンスとして、世界的に話題を集めている。

本フォーラムでは、日本科学未来館との主催のもと、「現実とは何か」という哲学的かつ科学的な問いに科学者とアーティストの対話から接近したい。脳科学者であり、SR (代替現実) 研究を起点に「現実」とは何かを問い続けてきた藤井直敬は、アピチャップン監督が生み出してきた現実と異世界、両者を隔てる境界線が溶けるような「あわい」をどう読みとくのか。また、VR技術で拡張する表現や映画の新たな可能性など、二人の視点が交わったとき、新たな地平が開かれるはずだ。

**クレジット**

主催 | 日本科学未来館、シアターコモンズ実行委員会  
協力 | 現実科学ラボ

**登壇者 / Panelists**

アピチャップン・ウィーラセタクン | 映画監督、アーティスト  
—  
Apichatpong Weerasethakul | Film director, Artist



Courtesy of Apichatpong Weerasethakul  
Photo by Supatra Srithongkum and Sutiwat Kumpai

藤井直敬 (ふじい・なおたか) | 株式会社ハコスコ取締役CTO。医学博士・脳科学者。一般社団法人 XRコンソーシアム代表理事、ブレインテックコンソーシアム代表理事。東北大学 特任教授。東北大学医学部卒業後同大学院にて博士号取得。1998年よりマサチューセッツ工科大学 (MIT)、McGovern Institute 研究員。2004年より理化学研究所脳科学総合研究センター副チームリーダー、2008年よりチームリーダー。2014年株式会社ハコスコを起業。2018年よりデジタルハリウッド大学大学院教授。研究テーマは「現実科学」。主な著書に、『つながる脳』(毎日出版文化賞受賞)『ソーシャルブレインズ入門』『拡張する脳』『脳と生きる』『現実とは?』など。

**司会 / Moderator**

宮原裕美 | 日本科学未来館  
—  
Yumi Miyahara |  
Miraikan - The National Museum of Emerging Science and Innovation

What is this “reality” that we believe we experience every day? As rapidly developing XR technology destabilizes and revises our perception and awareness of reality, it asks us to question the boundary between what is “reality” and what is not. *A Conversation with the Sun (VR)*, an experiential performance piece by film director Apichatpong Weerasethakul made in collaboration with Japanese VR creators, has been gathering international attention. The unique performance awakens senses laying dormant deep within our unconscious memories, overlapping the origins of life and death with the movements of the sun.

In this forum, organized with the support of Miraikan, a scientist and an artist will discuss the philosophical and scientific question, “What is reality?” How will Naotaka Fujii, a neuroscientist who has been researching SR (substitutional reality) for many years, interpret the realities and alternate worlds in Weerasethakul’s work, and the “rift” where their boundaries blend into one another? Bringing the perspectives of these two figures together, to discuss issues such as the expanding expressive possibilities in VR technology and film, is certain to open up new horizons.

**Credit**

Organized by Miraikan - The National Museum of Emerging Science and Innovation, and Theater Commons Tokyo Executive Committee  
Support | Reality Science Lab

Naotaka Fujii | Naotaka Fujii is a medical doctor, brain scientist, and CTO of Hacosco Inc. He is also the Representative Director of the XR Consortium and Brain Tech Consortium. He is a specially-appointed professor at Tohoku University. After graduating from Tohoku University School of Medicine, Fujii received his PhD from the same university. He has been a researcher at the McGovern Institute, Massachusetts Institute of Technology (MIT) since 1998. Deputy Team Leader at RIKEN Brain Science Institute since 2004, Team Leader since 2008; started Hacosco Inc. in 2014; Professor at Digital Hollywood University Graduate School since 2018. His research theme is “Reality Science”. His major publications include *The Connected Brain* (winner of the Mainichi Publication Culture Award), *Introduction to Social Brains*, *The Expanding Brain*, and *Living with the Brain*.



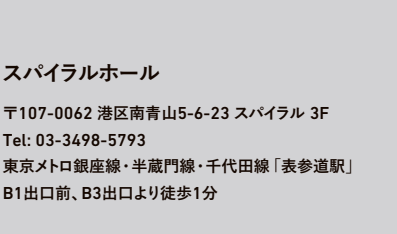


## 会場



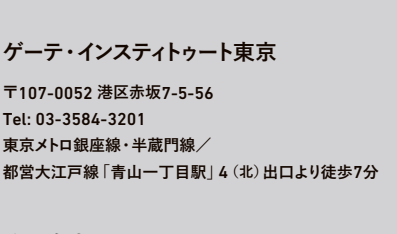
### 日本科学未来館

〒135-0064 江東区青海2-3-6  
1F 企画展示ゾーンb、7F イノベーションホール  
Tel: 03-3570-9151  
新交通ゆりかもめ「東京国際クルーズターミナル駅」1A出口より徒歩5分、「テレコムセンター駅」1A出口より徒歩4分  
東京臨海高速鉄道りんかい線「東京テレポート駅」出口Bより徒歩15分



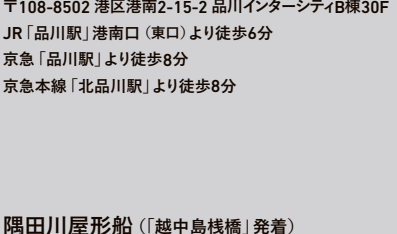
### 東京日仏学院 エスパス・イマージュ

〒162-8415 新宿区市谷船河原町15  
東京日仏学院 2F  
Tel: 03-5206-2500  
JR「飯田橋駅」西口／  
東京メトロ有楽町線・南北線・東西線B3出口より徒歩7分  
都営大江戸線「牛込神楽坂駅」A2出口より徒歩7分



### 駒込倉庫

〒170-0003 豊島区駒込2-14-2  
JR「駒込駅」東口より徒歩2分  
東京メトロ南北線「駒込駅」4番出口より徒歩2分



### 隅田川屋形船（「越中島棧橋」発着）

江東区越中島1丁目先 越中島公園内  
\*詳細は予約者に後日ご案内いたします。

## VENUES



### Miraikan - The National Museum of Emerging Science and Innovation

Special Exhibition Zone b/1F, Innovation Hall/7F  
2-3-6 Aomi, Koto-ku, Tokyo 135-0064  
Tel: 03-3570-9151  
Tokyo International Cruise Terminal Station (Yurikamome Line): 5 minutes walk from 1A Exit  
Telecom Center Station (Yurikamome Line): 4 minutes walk from 1A Exit  
Tokyo Teleport Station (Rinkai Line): 15 minutes walk from B Exit



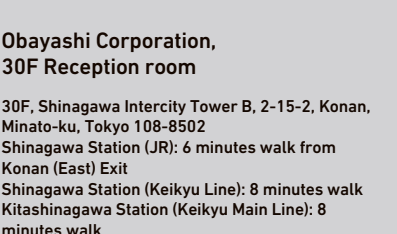
### Institut français de Tokyo, Espace images

2F, Institut français de Tokyo, 15 Ichigaya-Funagawara-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8415  
Tel: 03-5206-2500  
Iidabashi Station (JR West Exit / Tokyo Metro Yurakucho, Namboku or Tozai Lines B3 Exit): 7 minutes walk  
Ushigome-kagurazaka Station (Toei Oedo Line): 7 minutes walk from A2 Exit



### Komagome SOKO

2-14-2 Komagome, Toshima-ku, Tokyo 173-0003  
Komagome Station (JR): 2 minutes walk from East Exit  
Komagome Station (Tokyo Metro Namboku Line): 2 minutes walk from 4 Exit



### Obayashi Corporation, 30F Reception room

30F, Shinagawa Intercity Tower B, 2-15-2, Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8502  
Shinagawa Station (JR): 6 minutes walk from Konan (East) Exit  
Shinagawa Station (Keikyu Line): 8 minutes walk  
Kitashinagawa Station (Keikyu Main Line): 8 minutes walk

### Sumida River, Yakatabune Boat Cruises (Etchūjima-sanbashi)

Etchūjima park, 1, Etchūjima, Koto-ku, Tokyo  
\*Details will be provided to those who have made reservations.

# スケジュール / SCHEDULE

■ コモンズ・ツアー  
 Commons Tour  
■ コモンズ・フォーラム  
 Commons Forum

2024 **2** FEB **3** MAR

アーティスト / 演目	29 THU	1 FRI	2 SAT	3 SUN	4 MON	5 TUE	6 WED	7 THU	8 FRI	9 SAT	10 SUN	11 MON	12 TUE
<b>アピチャポン・ウィーラセタクン</b> <b>「太陽との対話(VR)」</b> Apichatpong Weerasethakul <i>A Conversation with the Sun (VR)</i>								18:00/18:30/19:00/ 19:30/20:00/20:30	13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/ 18:00/18:30/19:00/19:30/20:00/20:30				13:00/13:30/14:00/ 14:30/15:00/15:30/ 18:00/18:30/19:00/ 19:30
<b>Q / 市原佐都子</b> <b>「弱法師」</b> Q / Satoko Ichihara <i>Yoroboshi: The Weakling</i>									19:00	13:00/19:00	14:00 *ポストトークあり *Talk (after the performance)		
<b>サオダット・イズマイロボ</b> <b>「18,000の世界」ほか</b> Saodat Ismailova <i>18,000 worlds and more</i>		18:30-21:00	11:00-13:30/ 15:30-18:00 *アーティスト・トーク *Artist talk 13:30-15:00	11:00-13:30/ 14:00-16:30						14:00-16:30/ 17:00-19:30	11:00-13:30/ 14:00-16:30		
<b>ナスタラン・ラザヴィ・ホラーサーニ</b> <b>「Songs for no one – 誰のためでもない歌」</b> Nastaran Razawi Khorasani <i>Songs for no one</i>			14:30 *ポストトークあり *Talk (after the performance)	14:30									
<b>イム・ミヌク</b> *関連プログラム <b>「Hyper Yellow」</b> Minouk Lim *Related program <i>Hyper Yellow</i> Performance <i>S.O.S – Run Shin Shin</i> Talk event	プレビュー Private view 16:00	展覧会「Hyper Yellow」 Exhibition <i>Hyper Yellow</i> 12:00-20:00		パフォーマンス「S.O.S – 走れ神々」 Performance <i>S.O.S – Run Shin Shin</i> 17:00-18:30									トークイベント Talk event 17:00-18:30
<b>コモンズ・ツアー</b> Commons Tour			ツアー A   1日目 Tour A   Day 1 10:00-18:30	ツアー A   2日目 Tour A   Day 2 11:00-19:30						ツアー B   1日目 Tour B   Day 1 11:00-19:00	ツアー B   2日目 Tour B   Day 2 10:30-19:30		
<b>コモンズ・フォーラム #1</b> <b>「複数の世界、歴史、物語</b> <b>——多声的芸術はいかに可能か？」</b> Commons Forum #1 <i>Multiple worlds, histories, and stories</i> <i>—Is polyphonic art possible?</i>				16:00-18:00									
<b>コモンズ・フォーラム #2</b> <b>「ジェンダーとパフォーマンスの現在地」</b> Commons Forum #2 <i>Gender and performance today</i>										15:00-17:00			
<b>コモンズ・フォーラム #3</b> <b>「『現実』とは何か？</b> <b>——アピチャポン・ウィーラセタクン+藤井直敬の対話」</b> Commons Forum #3 <i>What is reality? A conversation between Apichatpong Weerasethakul and Naotaka Fujii</i>											16:30-18:00		



# クレジット

## シアターコモンズ '24

### シアターコモンズ実行委員会

委員長 | 相馬千秋 (特定非営利活動法人芸術公社 代表理事)  
副委員長 | 王淑芳 (台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター長)  
委員 | ベーター・アンダース (ゲーテ・インスティテュート東京 所長)  
委員 | サンソン・シルヴァン (在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ 文化担当官)  
委員 | バス・ヴァルクス (オランダ王国大使館 広報・政治・文化部 副部長)  
委員 | 大館奈津子 (特定非営利活動法人芸術公社 理事)  
監事 | 須田洋平 (弁護士)

### シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター | 相馬千秋 (芸術公社)  
制作・事務局統括 | 清水聡美 (芸術公社)  
制作 | 山里真紀子、芝田 遥、谷口裕子、阿部 幸 (いずれも芸術公社)  
企画アドヴァイザー | 大館奈津子 (芸術公社)  
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣、鈴木理映子 (芸術公社)  
広報 | 岩本室佳 (芸術公社)  
翻訳 | Art Translators Collective  
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)  
ウェブデザイン | 加藤賢策、伊藤博紀 (LABORATORIES)  
インターン | 藤崎春花、吉岡直哉  
経理税務アドヴァイザー | 山内真理 税務士事務所  
法務アドヴァイザー | 須田洋平 (弁護士 / 芸術公社)

### シアターコモンズ'24 技術スタッフ

舞台監督 | ラング・クレイグヒル  
照明 | 山下恵美 (RYU. Inc)  
音響 | 稲荷森 健  
映像 | 佐藤佑樹 (エディスタグローヴ)  
記録映像・写真 | 佐藤 駿

## シアターコモンズ '24

発行日 | 2024年2月28日  
執筆 | シアターコモンズ実行委員会  
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣  
翻訳 | Art Translators Collective  
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)  
デザイン | 望月滉大 (LABORATORIES)  
発行 | シアターコモンズ実行委員会  
Web: <http://theatercommons.tokyo>  
E-mail: [artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com](mailto:artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com)

# CREDIT

## Theater Commons Tokyo '24

### Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson | Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)  
Vice-chairman | WANG Shu-Fang (Director, Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan)  
Member | Peter Anders (Director, Goethe-Institut Tokyo)  
Member | Samson Sylvain (Attaché culturel, Embassy of France in Japan / Institut français du Japon)  
Member | Bas Valckx (Deputy Head Public Diplomacy, Political, Cultural Affairs, Embassy of the Kingdom of the Netherlands)  
Member | Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)  
Auditor | Yohei Suda (Lawyer)

### Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director | Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)  
Production Manager and Coordinator | Satomi Shimizu (Arts Commons Tokyo)  
Project Coordinators | Makiko Yamazato, Haruka Shibata, Yuko Taniguchi, Sachi Abe (Arts Commons Tokyo)  
Project Advisor | Natsuko Odate (Arts Commons Tokyo)  
Editors | Satoko Shibahara, Mai Hashiba, Rieko Suzuki (Arts Commons Tokyo)  
PR | Sayaka Iwamoto (Arts Commons Tokyo)  
Translation | Art Translators Collective  
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)  
Web Design | Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)  
Interns | Haruka Fujisaki, Naoya Yoshioka  
Accounting Adviser | Yamauchi-Accounting-Office  
Legal Adviser | Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)

### Theater Commons Tokyo '24 Technical Staff

Stage Manager | Lang Craighill  
Lighting | Megumi Yamashita (RYU. Inc.)  
Sound | Takeshi Inarimori  
Movie | Yuki Sato (Edith Grove)  
Documentation Video and Photography | Shun Sato

## Theater Commons Tokyo '24

Date of Issue | February 28th, 2024  
Editors | Satoko Shibahara, Mai Hashiba  
Translation | Art Translators Collective  
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)  
Design | Kota Mochizuki (LABORATORIES)  
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee  
Web: <http://theatercommons.tokyo>  
E-mail: [artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com](mailto:artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com)